
存在理由

京

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

存在理由

【Nコード】

N0077Y

【作者名】

京

【あらすじ】

人生つていうのはどこに落とし穴があるかわからない。順調に見える人生もふとしたことで台無しになっちまうし、どん底から這い上がってくる奴らだって大勢いる。結局のところ、生きるということとは生き物すべてに課せられているギャンブルみたいなものなんだろう。そしてそのギャンブルに負け続けている俺はある日、一人の少女と出会う。そいつは実はとんでもない奴で、でたらめな人生を歩んでいた。負け続けの俺と、でたらめな少女。果たしてどちらが幸せなんだろう。

1・翔

人生とは行動の積み重ねだ。

行動を起こさない人間には、何も起こらない。それがたとえどんな小さなものであるうとも、行動しないよりはずっとましだ。

流されるままに生きる人間は、決して何も手に入れることは出来ない。

もちろん例外はあるだろう。

行動を起こさずに、自分の運だけですべてを切り開いて行く人間も、もしかしたらいるのかもしれない。

だがそれは、少なくとも自分のことではない。

目標を持たず、ただ漫然と日々を過ごしていた俺にはわかる。

飛鳥部翔。一九歳。職業フリーター。

それが俺のすべてだった。大学に進学することもせず、かといって就職するわけでもない。高校を卒業した日、両親は泣いていた。

立派に卒業したからではない。先の見えない出来そこないの息子に対する後悔と絶望の涙だ。俺はさつさと家を出て、バイトを始めた。安い古アパートを借りて、そこで暮らし始めた。

今になって、自分の選択は間違っていたのだろうと思うようになった。

しかし、今さらどうすることもできない。

世間では一浪や二浪ぐらいどうと云うことはない。今から大学進学に向けて勉強でも始めれば良いのだろうが、あいにく勉強する気にもなれなかった。俺にはもう、受験に挑むだけの気力は残っていない。

そもそも、すべてにおいて俺は生きる気力に欠けているのだ。

バイトだって、生きるのに金が必要だからやっているに過ぎない。金があれば、こんなことはしないだろう。バイトは必要最小限。休日、ずっと寝て過ごしていた。寝ながら、自分と云う人間は、社

会に必要とされていないのだとつくづく思う。

何かしなければならぬという焦燥感。

何もする気になれないという無気力感。

何もせずに終わった一日に対する後悔。

延々と終わることのない思考のループ。

それが今の俺の日常だった。

もういつそ死んでしまえば楽なのかもしれない。しかし、自殺と云うものは相当のエネルギーを使うのだ。受験戦争に参加する気力すらわからない自分には、死ぬ権利すら与えられない。

しかしある日を境に、俺の人生は大きく変わってしまった。

一人の少女と出会い、俺は戦いに駆り出されることになった。

俺の周りでたくさんの人が死んだし、俺自身もひどく傷ついた。

しかし、不思議と俺は自分が不幸とは思わなかった。妙な充実感が俺を常に包んでいた。

それではお前は幸せだったのかと問われれば、俺には分からない。少なくとも、幸福感を感じてはいないと思う。

でもそれは、自分で選択して行動した結果なのだ。

だからこれでよかったのだと、俺は確信を持っている。

たとえこの先自分がすべてを失うことになっても、ましてや死ぬことになったとしても、それはしょうがないことだ。それは俺が、選択して行動を起こした結果なのだから。

だから俺はこの先、後悔することは無いだろう。

根拠は無かったが、俺は確信していた。

彼女と初めて出会ったのは、寒い冬の夜のこと。

人気の全くない深夜の道を、俺はとぼとぼと歩いてた。

俺はバイトの帰りだった。

そして彼女は、人を殺している最中だった。

1・冥

間違いない、奴らが近くにいる。
気配を探る。

自分の背後に二人。そして斜め前、暗がりにも一人。
いくら姿を消したって無駄だ。私は鼻が利く。嗅ぎなれた奴らの
匂いを間違えることなどありえない。

しかし、私は気付かないふりをして、夜道を歩き続ける。

『おい、冥。気付いてるか？ 敵だ』

頭の中で、声が響く。

『大丈夫。ちゃんと気付いてる。エミは少し黙ってて
『ちえっ。分かったよ』

返事を返すと、少しふてくされたような感じで、エミが云った。
まったくせつかちな奴だ。どうせ戦うことになれば、エミの力が必
要になる。

あわてることなんて無いのに。

さりげなく手にしているカバンを探る。中には追っ手を撃退する
ための武器が入っていた。刃渡りが二〇センチほどのナイフが二本。
そして、警棒が一本。私が使うのではない。使うのはいつもエミだ。
私は冬用の学生服を着ていた。首には地味な色をしたマフラーを
巻いている。カバンだって、高校生の間で通学用として広く使われ
ているものだ。髪の毛は肩までのセミロング。色は黒。パーマなど
も当てていない。はたから見れば、予備校帰りの真面目な女子高生
に見えるだろう。

敵に動きがあった。背後の二人が距離を詰めてきた。このままだ
と、戦闘は避けられない。敵の目的は、私の処分にある。

衝突が避けられないのならば、こちらから動いたほうが話が早い。
さっさと片づけてしまおう。

『エミ、お願い。あいつらを殺して』

『りようかい。ふふ』

嬉しそうにエミが笑うと同時に、私の意識はずつと遠のく。体が自分の云うことを聞かなくなる。

体と意識が引きはがされるような感覚にとらわれる。

意識が拡散する。周辺の空間を、私は知覚する。

人格の交代が行われ、高円寺冥は凶暴な殺人鬼、高円寺エミになる。

私は私の片隅で、エミの行動を感じている。

エミは残忍で容赦がない、生粋のサディストだった。他人をなぶり殺しにする以外の楽しみなど持ち合わせていない。

エミは不完全な存在だ。

生きるための体を持たない。普段は私の意識の中で、おとなしくしている。エミの力が必要になったとき（エミの持つ性質上、たいていはるくでもないことだ）に、この私、高円寺冥の体を借りて、ようやくこの世界とのつながりを持てるのだ。

カバンからナイフを取り出したエミは振り返り、後ろに向かって突進した。敵の二人が動揺するのが私にもはっきりとわかった。

心拍数の上昇。

急激な発汗。

それら身体情報が、手に取るようにわかる。

敵の一人は体の大きな男だった。

男は銃を持っていた。

銃口がこちらを向く。

しかしその銃口が火を噴くことはなかった。

男が狙いを定めるよりも早く、エミのナイフが、一人の心臓を深くえぐっていた。

男は喀血して倒れた。声を出すこともなく息絶えた。

もう一人の敵は女だった。その女から、恐怖の感情が発散されるのが知覚された。

エミも女の発散する恐怖を感じているらしかった。エミは明らか

に楽しんでいた。につこり笑った、もはや戦うことを放棄している女の下腹部にナイフを突き立てた。そしてナイフを回転させて、刃の部分を上に向ける。女がくぐもった声を上げた。

エミは無造作にナイフを上へ振り上げた。

女は下腹部から喉の下あたりまでを切り裂かれることになった。押さえつけるものがなくなって、女の内臓があふれだした。カエルがつぶれるような声を上げて、女は死んだ。

残りは一人だけだった。

そいつが銃を所持していること。

銃口がこちらを向いていること。

敵が恐慌状態に陥っていること。

それらの情報を、私は知覚した。

『エミ、気を付けて。まだ一人残ってる』

『分かってるよ』

余計なお世話だという感じで答えながらも、エミの体はすでに敵のほうへ向いていた。

エミが敵の動きを完全に把握しているのが分かった。

現在の情報を正確に把握すれば、次の行動を予測するのは簡単だ。敵は立て続けに三発の銃弾を発射した。

音はほとんどしなかった。サイレンサをつけているらしい。

しかし、そんなことはエミには関係のないことだった。敵の動きを十分に予測していたエミは、すでにその体を弾道からそらしている。弾が彼女に当たることはなかった。

エミは敵の喉にナイフを一閃した。

血が噴き出し、敵は簡単に崩れ落ちた。

体を痙攣させていたが、すぐに静かになるだろう。

『エミ、ありがとう。もう戻って』

『もう終わりか。もうちょっと遊びたかったな』

『良いから戻りなさい』

『……わかったよ』

つまらなさそうに、エミが呟いた。

エミとの人格交代は、基本的に交渉で行われる。

どうしてもエミが体を返したがない場合は、強制的に体を奪還することも可能だ。

ここ最近のことであるが、エミは私に、素直に体を返さなくなってきた。

エミは本来、私の意のままに動かせるものだった。

私からのコンタクトでエミに体を受け渡し、体を返してもらった。その関係が、崩れつつある。エミの自我が強くなってきたのかもしれない。

もしエミが私より強くなって、この体の主人格になってしまったら。

私が意識の片隅に追いやられて、一生を過ごさなければならなくなったら。

考えるだけでぞっとする。

今でこそ、エミを強制的に押さえつけることができるが、今後もしうである保証はない。

だからと云って、どうすることもできない。

私を追ってくる人間がいる限り、私にはエミの力が必要なのだ。

『じゃあ行くよ』

エミがそう言った時だった。

私は人間の存在を知覚した。エミも同じだったらしい。

素早く左右に首をめぐらせ、そして一人の人間の存在を見つけた。おそらくすべてを見ていたのだろう。茫然とした様子で、一人の若い男が立ち尽くしていた。

『あいつを殺さないといばれちゃうね』

エミが言った。楽しそうだった。

ダメだ。無関係の人間を殺すわけにはいかない。

『ダメ！』

私がエミに向かって叫んだときには、エミはすでに男に向かって

走り出していた。

2・翔

一体何が起こっているのか、すぐには分からなかった。

まず最初に俺が見ていたのは、一人の少女の後姿だった。

予備校帰りだろうか。地味な感じの少女だった。

きつと目標を持って、日々勉強に励んでいるに違いない。俺にも高校生だった時があったはずだが、実感はわかなかった。高校時代だけではなく、俺の人生のすべてに、なんだか靄がかかっているみたいだった。

そんなことをぼんやりと考えていると、不意に少女が振り返った。どうしたのだろうと思う暇もなかった。

少女の手にはナイフが握られていた。いつから握っていたのかは、わからなかった。彼女はそのままこちらに突進してきた。

突然のことで体の反応が遅れた。普段から運動とは無縁の生活をしていた俺は、とっさに逃げようとして、無様に転んでしまった。

地面に手を付いたままあわてて逃げ出そうとしたが、少女がナイフを振り上げた相手は自分ではなかった。突然塀の陰から飛び出してきた男の胸のあたりに潜り込むのがはつきりと見えた。

俺はもう立ち上がることもできなかった。脳は逃げろと叫んでいる。しかし、体が動かなかった。俺にできるのは、その場でただ震えているだけだった。

俺がただ恐怖にすくんでいる間も、少女の動きが止まることはない。俺がまばたきをする間に、どこからともなく現れたもう一人の人間が現れ、そして殺された。どうやら女のようにだったがよくわからない。

二人を片づけた少女は身をひるがえし、俺に背を向けた。

ほっとする暇もなく、銃声が聞こえた。体が硬直して、息が詰まった。

動いている人間は二人。

銃を使ったのは、少女のほうではないらかった。

ほどなく最後の一人も動かなくなり、少女は黙って自分が殺した人間の亡骸を見下ろしていた。

なんてものを見てしまったんだ。俺の目の前には二人の人間が横たわっている。どう見ても死んでいた。医学の知識など俺にはないが、あれで生きているわけではないだろう。

すべてに現実味がなかった。

俺は実はアパートの部屋で布団にこもっていて、悪夢を見ているんじゃないか。そんなことを考えていると、不意に少女が振り向いた。

目があった。

まずい。

そう思った時には、少女はこちらに向かって突進してきていた。

手には鋭く光るナイフ。

殺される。

それは確信だった。俺の人生は目の前の少女によって、あっけなく幕を下ろすこととなるのだ。まだ何も始まっていない人生。そしてもうすべてが手遅れの人生。

ここで死んでしまっても、それはそれで良いことなのかもしれない。一瞬だが、そう思った。どうせ生きている価値は自分にはない。俺の頭など粗末なものだが、そのぐらいは理解している。

頭ではすべてをあきらめていた。しかし、体は違った。

俺は自分でも気づかないうちに横に飛んでいた。いざと云う時は、理性を押さえつけて生き残ろうとする。まったく生き物は厄介にできている。しかし、おかげで俺は死なずにすんだ。さっきまで俺がいたところに、突進してきた少女がナイフを叩き込む。よけきれずに刃が腕をかすった。

致命傷とは程遠い傷だった。服と、皮膚の一部を切り裂いただけだ。出血も軽い。

少女はこちらを見た。

笑っていた。

楽しそうに笑っていた。

まるで無邪気に遊んでいる子供のような。

俺の思考はここで止まった。

少女が、こちらにナイフを向けたからだ。

俺の後ろにあるのは、塀だ。

もう、逃げる事ができる場所などない。

少女がナイフを振り上げた。

俺は思わず目をつぶった。

俺は死ぬ。

今度こそ間違いなく死ぬ。

最後の瞬間を待つことしか、俺にはもう残されていなかった。

しかし、なかなか最後の時は訪れなかった。

俺はゆっくりと目を開いた。

少女は相変わらずそこにいた。しかし、振り上げた手は下ろされていた。ナイフはまだ握っていたが、攻撃の意志は感じ取れなかった。

助かった。

全身から力が抜ける。思わず倒れそうになったが、塀にもたれかかることでかろうじてこらえた。

少女は俺を見たまま、何か考えているようだった。

しばらく黙っていた少女は、何かを決心したように頷いた。

「少し、お話しても良いですか？」

静かに、しかし強い意志を持った声で、彼女は言った。言葉こそ丁寧だったが、お前に拒否する権利はみじんもないのだと、その目が告げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0077y/>

存在理由

2011年11月13日03時11分発行